

体として光学顕微鏡レベルの記述が多く、最近、紅藻について蓄積が多くなってきた電子顕微鏡レベルの知見の記述は極めて少い。分類編ではウシケノリ亜綱（原始紅藻亜綱）と真正紅藻亜綱のダルス目、アクロケテウム目、カワモズク目、ウミゾウメン目、ガラガラ目、カギノリ目、テングサ目、カクレイト目、ベニマダラ目が扱われる。この第2部はPart Aと記され、残りのサンゴモ目、スギノリ目、マサゴシバリ目、イギス目はPart Bとして後日刊行の予定と聞かすが、本書では言及はない。インドの紅藻の分類については1930年代のF. Boergesen博士（デンマーク）の先駆的な研究以来、マドラス大学の先の教授M. O. P. Iyengar博士と今回の著者となった3人を含む彼の弟子達を中心とする研究により多数の論文が出たが、それらを纏めた書物は皆無であった。この点本書刊行の意義は大きく、分類編の後半の刊行が待たれる。しかし、本書には多くの難点もある。図にスケールの表示がなく、紙質のせいもあって図が鮮明でないこと、掲載されている図や写真は外国産の、しかも外国人によるものが多いこと、最新の論文の引用が少いこと、電頭に基づく記述が極めて少いこと、文献欄に引用文献の脱落が多くあること、索引がないことなどである。

(千原光雄)

□三浦昭雄(編): 食用藻類の栽培 150pp. 1992. 恒星社厚生閣. ¥2,500.

採苗し、たねをまいて栽培する海藻は戦前は皆無であったが、昨今はアサクサノリ、ワカメ、コンブは勿論のこと、モズク、イワズタなどおよそ食用となる藻類のほとんどが人工栽培されるようになってきた。藻類の人工栽培には生活史・生理・生態などの知見が基礎となる。本書は食用藻類の栽培技術の実際面を述べるとともに、それらの純生物学的知見の解説にも紙面を割いている。扱われる藻類はノリ（三浦昭雄）、ヒトエグサ（喜田和四郎）、ワカメ（秋山和夫）、コンブ（川嶋昭二）、オキナワモズク（新村 巖）、アオノリ

（大野正夫・松岡正義）、クビレズタ（当真 武）、マツモ（内山 努）、ヒジキ（四井敏雄）、スイゼンジノリ（右田清治）、オキチモズク（右田清治）、ハバノリ（右田清治）、ムカデノリ（右田清治）、イシモズク（四井敏雄）、ウミゾウメン（四井敏雄）、ミル（四井敏雄）、トサカノリ（喜田和四郎）（カッコ内は著者名）の17種であり、ほかに食生活の面で最近注目されている藻類の食物繊維についての解説（平野敏行・鈴木 健・白井隆明）が11頁に亘って収録される。本書は1991年春開催の日本水産学会大会のシンポジウムの講演を中心に、質疑応答と総合討論の要旨を加えてつくられたもので、今世紀後半のおよそ40年間に、主として日本で挙げた食用藻類についての研究成果の概略を知るにも好適である。

(千原光雄)

□徳田 廣, 川嶋昭二, 大野正夫, 小河久朗: 図鑑 海藻の生態と藻礁 198pp. 1991. ¥14,800.

202種の海藻（海草も含む）と海藻群落造成の目的で作られた各種の人工藻礁への海藻の成育の様子が美しいカラー写真により収められる。前半の海藻の生態の部では、日本沿岸を5つの分布域に分け、それぞれの代表的な種類を扱い、後半の藻礁の部では、種々の異なるタイプの礁や表面を硫酸第一鉄で処理した礁などにおける海藻群落形成過程を丹念に撮影、紹介し、さらに終りに藻礁の歴史と各種藻礁の図解入り解説一覧を添えている。またアマノリ、ワカメ、コンブなど7種の海藻養殖および寒天づくりの風景の触りの写真が所々に挿入される。編集および執筆者は学者・企業人がつくる「海藻魚礁（藻礁）研究会」のメンバーであり、天然の海で海藻がどのような姿で生え、またいかにして人工藻礁に海藻を成育させるかを中心に、素人が見てもわかる海藻図鑑を念頭において本書を作ったという。収録の写真の多くは潜水撮影によるものであるが、その色調はなかなかの見事さで、見ていて楽しい。楽しみながら海藻の成育の様子を知り、そして名前を知ることが出来る。

(千原光雄)